

學界展望

いはゆる「言語學的古生物學」の成立

龜井孝

一

本邦において耳慣れないばかりでなく、また、先進の歐洲の學界においても、専ら便宜上用ゐられてゐるだけで、必しも一般の承認を満足に受けてゐるわけではない名をこゝに標題に掲げるのは、つまりほかにこれに代はるべき適當な名がないといふ理由以上に出でるものではない。「いはゆる」といふ限定を冠せしたのは、そのためにほかならない。歐洲の言語を何なりと學んでゐる人なら、この「言語學的古生物學」が原語たる *Linguistic palaeontology* なり *Linguistische Paläontologie* なりを、いはゞしきうつしに譯したものであることは容易に推知し得る所であらう。

こゝ簡単に定義するならば、言語學的古生物學とは、比較言語學の方法によつて再構推定せられた語源を手がかり

に、かゝる再構語形が實際に流通してゐたと思はれる社會をその研究對象に擇ぶところの、先史古代學の一分野であるといひ得る。たゞし、比較言語學の成果から先史古代學に對する寄與を期待し得るのは、今日のところ、印歐語族 (Indogermanische Sprachfamilie, Indogermanic family of languages) の領域に限られてゐる⁽¹⁾。従つて、言語學的古生物學などいふ名を好んで設定するよりも、せいゝ形式的に「言語學的古生物學」的方法を、乃至は、せめて、先史古代研究の一部面として「言語學的古生物的」視野を、認めておくにとどめた方が研究の實踐にとつては無難であつて、もし一定の對象領域を限定せずにおかうとするならば、ことごとくしい名のごときは無用である。形式的論議を必しも厭はないドイツのポジテイキスト達が、命名問題に無關心なのは、その關心が、むしろ綜合的な先史古代學の全野に向いてゐるためと解せられる。それにも拘らず、「言語學的古生物學」の名を、一應、こゝに保留しておく所以は、本稿の意圖が、いさゝかこの方法の射程と、その視野の限界を眺めわたしてみることによつて、比較言語學の先史古代研究に對する寄與のほどを測定し確認してみたいといふ一般的問題に係るからである。決して純粹に言語學的でもなければ、なほ更のこと、また、本質的に古生物學とはみなし得ぬその不當な稱呼、その研究成果に對する援引資料からみては僭稱である「言語學的」の一義的な決定、従つてまた、たゞに漠然たるのみならず、本名詮自稱を缺く言語學的古生物學の對象領域の親縁を、それ、すべて根柢においては、その方法自體の自己批判の立場から顧みらるべきものである。言語學的古生物學が自らの立場を主張して、將來にその強靱な存續を維持しようとするには、その、學としての自律に對する自覺をなさればならず、それには、方法的自己批判に俟つべき學的內實の闡明と醇化が當然に論理的な先決要件である。術語の問題は、その結果、派生するものと認められる。

いはゆる「言語學的古生物學」の成立

しかし、とにかく、古生物學といふ表現にこだはるなら、この命名は斥けなければならぬ。言語學は、記憶の傳承の裡に言語的表現として残つてゐる、物質的生活および精神的生活の、前代の遺構を觀念的に再現し得る可能性を有つのみであつて、考古學のやうに、蒼古の世界の遺物をまのあたり手にとつて、直接にこれを觀察するといふことは、それ自體としては、許されないからである。明かに、言語學的、古生物學とは、嚴密な眼からみれば、形容矛盾である。この場合、言語學的、古生物學が、實際には、言語學的視點以外の立場をも併用するといふ實踐上の問題の處置については、敢へて咎めだてしないことゝして。

もとより、言語學的、古生物學といふ、語の結合の工案が言語學を古生物學的研究の殊異なる補助手段として援用し、その成果に大いなる期待を寄せて、この興味ある一方向に特に優位を與へようといふ意圖に出でるものであらうといふことは窺はれる。しかし、この立場からして言語學の重んぜられるのは、畢竟、媒介者としてにすぎない。言語學的研究自體の趨く一方向としてこれを追求し、かつは遵守してゆかうとするならば、言語學的、古生物學とは、この命名に孕まれる論理的な非嚴密性の發揮する表現價値の魅力にのみ、その存続の意味を認めるほかない。従つて、最初の命名者がいかなる意圖をもつてゐたにせよ、名が實に副はぬ一層の難點は、限定辭より被限定辭の方にある。言語學的、古生物學の取扱ふ材料が、所詮、言語であることに基いて、その視野が文化古生物學の對象たる物質文化より、精神文化の方を明かにし得る傾向にあることは、論より證據、實際の研究がそれを示してゐる所であつて、印歐人の原住地の問題に絡んでは、その生活圏を決定する動植物の分布を知ることが今日においてもなほ重要な課題たるを失ひはしないが、比較言語學の齋す先史古代研究への寄與は、此を公平に眺めるなら、原住地そのものゝ位置決定

に對してより、原住地における生活の諸様式の闡明に對して一層大なるものがあらう。故に、この點のみを以てして
も、「言語學的古生物學」なる命名は十分に學的なものとはいひがたい。その上、印歐語の語彙における諸々の動植物
名も、また、直接には、印歐人のそれらに關する知識を我々に知らしめるものにすぎない。奇矯な例を用ゐて誇張し
ていへば、現代の歐洲各國語に「罇」および「煙草」を現はす語が弘く分布してゐるからとて、歐洲人の祖先が、煙
草の原産地や罇の棲息地から、今日の歐洲へ移住してきたものと斷定することは不可能である。しかし、もつばら比
較言語學の成果に頼るよりほかに途がなく、而して語源が音韻法則的に難のない場合には、我々はこれに似た結論へ
導かれる危険に暴されてゐるのである。これは、比較言語學の齎す結論から、直ちに古生物學的事實の推定を行ひ得
るものと、一般的に考へるならば、その誤謬なることを示すものである。従つて、この見地からすれば、言語學的古
生物學といふ構圖は、その根柢から許しがたいものとさへなる。

すなはち、言語は、その表現するものととの聯關において成立するものではあるが、一方、それ自體で、對象的な事
物の客觀的存在とは別個に、自己完結的な獨自の意味表現の世界を、ドイツ哲學の好んで用ゐる語を以てすれば、客
觀的精神として構成してゐるのであつて、いはゞ言語自體のイデーから、物自體のイデーへと移ることは、當然、飛
躍を犯さなければならぬのである。たゞ、それは、經驗的實證にとつて、許さるべき飛躍なのである。ゆゑに、その
學的構成の理念の上において適當な修正を施すならば、言語學的古生物學の成立をひとへに否定し去ることこそ、單
なる懷疑論に墮することゝならう。

しかし、言語學的古生物學の方法に、上述のごとき飛躍があるといふことは、所詮、その忘れてならぬ宿命である。

いはゆる「言語學的古生物學」の成立

かゝる宿命に制約される解釋を先史學がその結論のために利用しなければならぬといふ事實は、一方また、先史古代學について、その資料面における弱點を示すものである。かゝる資料不足の間隙を埋めるものとして、言語學的古生物學にかけられる期待が大であるとするれば、それだけ、言語學的古生物學の性格の解明は、それ自體にとつて、同時に、先史古代學のために緊要なこととなる。けだし、言語學的古生物學上の成果は、即ち先史古代學にとつて、その重要な内容を形作るものとなるからである。

上述せるところを以てすでに窺はれるであらうやうに、言語學的古生物學には、大略、分類して次の三個の問題が含まれてゐる。即ち、印歐祖語 (Urindogermanisch) を語つてゐた人間の營んでゐた生活の諸様式如何。その生活環境如何。かゝる生活環境の、實際の地理的位置如何。この最後の問題は、すなはち、原住地の問題である。原住地が解決されれば、生活環境の地理的條件はおのづから明かになり、物質的生活の輪廓も一層の精確度を以て描寫し得るに至るわけである。従來、言語學的古生物學にとつて、原住地の位置づけは、その窮極の目標であつた、各學者達の辿る途こそ、一樣ではなかつたにしても。

ところで、問題を一層綜合的な見地から見渡すためには、こゝに考古學や民族學やの成果をも顧慮すべきではなからうか。たゞし、それを顧慮すべきならば、またいかに顧慮すべきであるか。これも問題である。つまり、言語學的徵證によつてのみ原住地を決定するには、次節に例示することく、固より種々の困難がつき纏ふのであるが、さりとて、考古學上の證跡や民族學上の事實がどのやうな形において果してこゝに利用し得べきであるかは、それ自體、また一個の、批判をまぬかれがたい問題となるのである。けだし、獨自の途を經ておのゝ到達する結論は、當然、

相互に個有の價値を主張するであらうから。しかも、それは、個有の價値たるを出でない。従つて、それは、別個に吟味さるべき、あらたな問題を生ずる。即ち、それら結論の間に、いかなる一致があるか、或は乖離や撞著がありはせぬか、はたまた、そも／＼何らかの聯關があり得べきか。^(三)

しからば、何ゆゑに、かやうな言語學的古生物學の特異な研究は起つたのであらうか。もとより、これは、比較言語學の成果を利用して、いまなほ新たな成長をつとげつゝある派生的な領野である。研究がその緒についてからも、必しも多くの歲月を閲してゐるとはいひがたい。すべての比較言語學者のうちで、この問題に相當の興味を惹かれてゐる人さへどれほどゐるかも、またおぼつかない一方、考古學の進展によつて、ますます／＼豊富になりまさつてきた新資料は、比較言語學の結論をも修補改訂してゆくがゆゑに、比較言語學を足場とする言語學的古生物學がその影響を蒙ることは免れがたい。

しかしながら、思想的系譜を辿り究めてゆくときは、その誕生の母胎をドイツ浪漫派の精神にまで遡らしめて、初めて眞の成立を解釋し得べきであると信ずる。かのフリードリヒ・シュレーゲル(Friedrich Schlegel)が、「印度人の言語と智慧について」(Über die Sprache und Weisheit der Indier, 1808)を著したとき、彼の研究心を搖り動かしたものは、かつて文藝復興期の人々をギリシヤ研究へ驅り立てたと恰も同じい、新時代の曉鐘を打ち鳴らさうとの、あの情熱であつたにちがひない。ドイツにおいて長く愛用され來つた比較文法(Vergleichende Grammatik)の名の創案は、一にシュレーゲルのこの著に歸せられてゐるし、いはゆる屈折語(flektierende Sprache)の完成形態を梵語(Sanskrit)に求め、印歐古文代の發祥地をインドに擬する立場も、また彼に遡るものと考へられる。^(四)これ

いはゆる「言語學的古生物學」の成立

を浪漫派の思潮の全聯關について眺めたすときは、中世世界がその深い關心と思慕的であつたのに比べて、東洋への異郷趣味の展開はさして著しくないかもしれない。しかし、なほかつ、世界史の視野が東方へ伸びたといふ實證の野に對する寄與をこゝに考量するなら、言語學といふ處女地に浪漫派の驍將の印した足跡も亦、つゞく世代に對し、やはり長く不斷の導きとなつたものといふべきである。眞の言語學者であるより、思想的影響力の大きい時代兒であつた點に、彼の歴史的役割を認むべき限り、問題の解答をこゝに求めても、詮なきわざに終るであらう。^(五)私は、問題そのものが藏してゐる浪漫的性格の由つて來るところをつきとめようとして見たまなのである。

しかし、かゝる觀方に對しては、言語學的・古生物學形成の根源は、人間本來の、古文化に對するやみがたい浪漫的思慕一般に歸すべきであつて、何も敢へて以てドイツ浪漫派にまでその起源を求めるとは及ばない、それは歴史研究の當然進むべき一方向として生れいでたにすぎないといふ人があるかもしれない。が、かゝる方向が、ギリシヤの古典世界のあなたへ翻翔せんとしたドイツ浪漫派の精神の發露の、一つであつたといふ時代史的意義は、その必然的な展開の精神的背景は、やはりあくまでもこれを看過してはなるまい。このことは、浪漫的精神が——もし、いひ得べくば——本質的にドイツのものであるといふこと、それともまた、牴觸しない。浪漫主義的精神形態の自覺と把握、これぞヨーロッパ精神史上において、なかんづくドイツ浪漫派の致した寄與である。而して、今日、浪漫的性情とは凡そかけ離れてゐる言語學が、——まさにフォスレル (F. Vossler) ^(六)が貶しめて形而上學的實證主義と刻印づけたところの、ドイツの主流の言語學が、——しかしながら、源をたゞせば、あの浪漫派の一活動の産物として生れいでたといふことは、げにも歴史のたはぶれであつた。

かくいへばとて、これこそ單なる偶然でない。たはぶれの所作とみせて、我々に、その眞の解釋を強ひる歴史の必然こそは、人間精神の、自由にして有目的な、自己展開の圖にほかならない。言語學が浪漫的に構想せられ、實證主義的に體系づけられた過程もまた、ドイツ精神史の一縮圖としてみて、はじめてその意義を生ずるであらう。されば、言語學を形成したものは、もとより單なる浪漫的心情ではない。すなはち、その發達が現實に棹さした流れの源が、歴史上の思想運動として新時代を創造した浪漫派にあつたといふことゝ、その後の途が、實證主義的完成を辿つたといふことゝには、何の矛盾もないわけである。かくて、一方、言語學的研究の課題のうちから、浪漫的な解釋の領域として、その攻究を後代に委ねられたもの、これぞ言語學的古生物の問題にほかならぬ。その本質上、言語學的古生物學が言語學固有の領域から自ら離脱したのもこれまたその運命であつた。

いまこの運命の糸をたぐつてゆくとき、この浪漫派の嫡流は、生みの親たる時代兒童がその本舞臺を退いてのち、かのドイツ・フィロロギーの精神に培はれて成育をつゞけ、その後、フィロロギーと言語學とが無用にきびしい對峙状態を醸成してからは、先史學に手をさし伸べられて、その成果を深めつゝあるものとみられる。とはいへ、これこそ因果であつて、ドイツ言語學が對象を印歐語に擇ぶかぎり、その研究はインドゲルマニスティックの理念のもとに統一され、その精神に貫かれてゐる。ドイツの言語學者にとつては、祖語の語られてゐた歴史的世界が歐亞の天地のいづくにか必ず實在してゐねばならぬといふ確信と、それをつきとめずばやむまじい郷愁の念とが、いざとなれば、研究を導くイデーと、いな研究そのものへ驅り立てる本能となるのである。こゝに、見失はれた浪漫的精神のゆくへがある。比較言語學のつきゝに齎す新しい成果に對しては、もとよりそれ自體に宿る價值を以て、一往、満足しは

するけれども、又、さらにこれを先史古代研究へ促進せしめるところの好もしき媒材と認めることによつて、言語研究と先史古代學との聯關からも、その關心の眼を離し得ないといふのが、ドイツ比較言語學の傳統精神であらう。この點において、ヒルト(H. Hirt)は、まさしく本質的意味でのドイツ的、インドゲルマニストである。

これといふ對照をなすのは、フランスのメイエ(A. Meillet)である。比較言語學の専ら携る所は、諸言語間の對應關係を組織的に確立することであつて、印歐祖語がその昔も果してヨーロッパで實際に使用せられてゐたか、はたアジアのいづこで使用せられてゐたかなど、いつた問題は、比較言語學的研究の結果に寸毫の變更をも招致するものではない。かゝる問題は、言語學徒にとつては、歴史家にとつての關心事である。言語學的研究の對象としては、たゞ印歐諸語(des langues indoeuropéennes)あるのみなのである。従つて、祖語の復舊は、祖語の研究を直接に目的となされるものではなく、研究手段として要請せられるに止まるものとなる。つまり、メイエの立場は、印歐諸語の比較研究にあり、これに對して、ヒルトの立場は、印歐祖語そのものゝ研究にあるのである。かゝる相違は、後者が史學者の風格を帯び具へてゐるとすれば、前者は自らを一義的に社會學徒として意識し限定してゐる點より特徴づけられよう。メイエの態度が、フランスの傳統的な實證論的思想に胚胎するものであることは、明かである。

フランス言語學界の最も新しい動向が、今日、印歐語そのものゝ内部における展開を辿らうと努力してゐることは勿論注目すべきであるが、これは史的言語學の二つの視野の一たる回顧的^(九)な方向を徹底せしめたものであつて、方法論的にいへば、視野を煙霞の彼方へまで伸ばさうとしたにすぎぬものと評して可い。比較方法の及ぶところ、ぎり

一杯、印歐祖語史の再構的記述を押し進めてみようといふ、限界への意識がこゝではつきりしてゐるであらう。おぼつかない手まさぐりを果しなく續けるといふやうなやるせない感傷には流されない。フランス言語學に宿る傳統的精神は、極めて明快に自己を社會學的研究に屬する一分野として規定するものであつて、ドイツにおけるがごとき意味での歴史的關心には甚だ乏しい。従つて、たとへば、古代語の組織の特質のうちに未開社會の思考様式との聯關を發見してみようといつた方向を辿るのは、類型化していへば、まあ、フランス的な行きかたなのである。こゝにあるのは、浪漫的なこゝろではなく、冷徹なまなこである。

さて、以上は、ごく粗い筆づかひを以て描いた結果、行論空疎に流れ、把握の仕方また觀念的概括化にすぎるといふ譏もあるかもしれぬ。しかしながら、一面、言語學的古生物學の榮え得る當然の素地がドイツにおいて、少くとも他の何處の國におけるよりよく培はれてゐるといふ事實に對しては、これだけの輪廓でさへ、相應に暗示的ではあり得たことと思ふ。故に、アドルフ・ピクテの研究にもかゝはらず（註一、參照）、なほかつ、言語學的古生物學をドイツの學であると考へることは決して無稽ではないと思ふのである。そして、現に、さうであることこそは、動かしがたい事實である。⁽¹⁰⁾

(第一節・註)

(一) 本文には、イギリス及びドイツの語形で擧げて置いたが、この「言語學的古生物學」なる稱呼の創始は Adolf Pietsch *Les origines indo-européennes ou les Aryas primitifs, essai de paléontologie linguistique, 1859—63* に基く。ただし、だからといつて、他國に比し、特にフランスの學界でこの名が固執されるといふ傾向は認められな

いはゆる「言語學的古生物學」の成立

一 概論 第十六卷 第一・二號

(二) Indogermanisch という形は、主として、ドイツに行はれる。フランスでは Indo-européen を用ゐる。日本語では、印歐語といふと簡潔であるから、書く際にはこの方を探るが、ロでいふ場合には、インドゲルマンの方が耳に親しい人が多いのではないかと思ふ。しかし、所詮、対象としては「印」である。印歐とは、いふまでもなく、印度歐羅巴の略。

(三) これは、ひとり、言語學的、古生物學的の關與するところではないし、本稿において、この點まで觸れてゐる紙幅の餘裕はない。たゞし、簡潔な敘述を以て明快な問題をさばつてゐるものと、ト、ヤ・ンクエーン (Fr. de Saussure) の批判あるを指摘して置く (cf. Cours de linguistique générale, chap. IV, § 3)。また、特に問題を言語學的、古生物學的の立場から取扱つたものと、次の論文がある。

J. Fraser, Linguistic evidence and archaeological and ethnological facts, (from the proceedings of the British Academy) 1927.

(四) Sämtl. W. Bd. VIII. (zweite Original-Ausgabe, Wien 1846) S. 270 ff. 以下、三十五頁以下、「民族の最古の移動の歴史」(Von den ältesten Wanderung der Völker) の中で、「言語學的、古生物學的」的思想の胚種を含むものとして、

(五) 著者の、オット・ヤスペルセン (Otto Jespersen) の著、*Die Entwicklung der Sprache*. cf. *Language: its nature, development and origin*, chap. II, § 2.

(六) Vgl. Idealismus und Positivismus in der Sprachwissenschaft.

(七) Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, 8e ed. p. 79—80.

(八) 彼は、その E. Durkheim を模倣して「社會學年報」の協力者の一人となつた。

(九) E. Benveniste, Origines de la formation des noms en indo-européen I (1935) の序文を参照せよ。キーンランドの J. Krylowicz の「國一語向を宗る」(cf. *Études indo-européennes*, I, Kraków 1935) の「印歐語の年代學的、chronologie

を問題とする行き方は、言語學的古生物學の方法をも反省せしめるものとして、注意すべきであると信ずる。

(一〇) 「言語學的古生物學」の發達については、シュラーマン (Otto Schrader) の著 Sprachvergleichung und Urgeschichte の第一部の前半 (S. 1—129. „Zur Geschichte der linguistischen Paläontologie“) が、その敘述のため割かれてゐる。故に、詳細な具體的史實については、これに譲る。

二

しからば、言語學的古生物學は、浪漫的的精神によつて構想され、その成立の思想的背景には、本質的に浪漫的の搖曳を認めざるを得ないのである。しかし、いまや、觀點を新にして、本質の解釋よりも事實の觀察へと、針路を變へたい。すなはち、具體的に取扱はれた問題に例を仰いで、この結論の即物性を檢討することにより、當該の研究が提起し要求する言語學的古生物「學」としての、その經驗的な成立の問題に、關心の重點を移さうと思ふ。けだし、研究精神を支へるものが浪漫的の精神であつたといふ事實、いな、いまもなほ、さうであらうといふ事實さへ、その、實證科學としての、客觀的な成立の可能を否定する所以とは、決してならないであらうから。従つて、既得の所與たる「言語學的古生物學」的諸研究が、以下において、まさしく批判的な承認のもとに再定立し得るかぎり、かゝる實證上の成果は、即ち、「言語學的古生物學」を事實的に裏づける資料として、その成立をそれ自ら內在的に支持するものとなるであらう。もつとも、順序としては、比較言語學上の問題で、豫備論的に解説しなければならぬものが少くないと思ふけれども、今は、一足飛びに、前節との聯關から、いはゆる原住地論 (Urbematsfrage) を取上げる。

いはゆる「言語學的古生物學」の成立

さて、印歐祖語にまで溯り得る樹木名は、相當に豊富であつて、すなはち、比較言語學的研究の結果、各語派間に語源的對應を求め得るものには、かしは・いちむ・やなぎ・とねりこ・白楊・菩提樹・にれ・はしばみ・はんの木・しらかば・ぶな^(一)がある。これらを綜合して考へれば、印歐祖語を操つてゐた先史民族、即ちいはゆる印歐人 (Indogermanen) の原住地は、これらの樹木の繁茂してゐた森林地帯であつたと推定せられる。その上、もし、これらの樹木の分布状態が、そして、さらに出來得べくば、有史以前のそれまでも、判明すれば、それによつて、印歐人の原住地の地理的位置を限定してゆくことができるわけである。この點に關して、特に論争を惹き起したのは、ぶな (deut. Buche, eng. beech) である。この樹は、現在、ケトニヒスベルヒからクリミヤへかけての一線を東の限界として、それより西に生育する^(二)。また、發掘の結果に基く推定によれば、この樹の分布がデンマルクからスカンディナヴィアへと及んだのは、やうやく青銅器時代以後なのである。その上、また、古い史料の報ずる所に從へば、これはガリヤ及びブリタニヤには生えてゐなかつたといふ^(三)。従つて、ぶなを知つてゐた印歐人の生活圏は、地域的にこの樹の分布範圍を以て、まづかなりの限界を劃し得るものと考へられる。かくて、ホープス (J. Hoops) 及びヒルトは、これをその最も有力な證據の一として、印歐人の故郷を、ほど北ドイツ、バルト海沿岸地方に擬する^(四)。いま、具體的に、ぶなを表はす語形の、各語派間における對應例を示すと、

ahd. buohha (ags. bōc'treo, anord. bōk), lat. fagus, gr. phēgōs (dor. phāgōs); russa. božy, kurd. (iran.) būz.

なほ、一般には、これに、ケルト語よりの例として、かの「ガリヤ戰記」にあらはれる silva Baecenis (Caesar,

Bell. Gall. VI, 10) が加へられる。しかし、これは果してケルトの例としてこゝに援引し得るものであるかどうか知らない。たゞ、ケルトの例は、あつてもなくても、ある意味では結論にとつて大した影響がない。西方語派群からはすでにラテン及びゲルマン諸語から例が出てゐるのであるから。これに對して、問題はサテム語 (Saten Sprachen) の示す例にある。(五) すなはち、右の對應例中、最後の二つのみの間に語源的聯關を認めることは、一往、容易であるが、これらと、*fagus* その他、ケントム語 (centum-Sprachen) が出す所の例との間に、眞の語源的對應が認め得べきか
いなかは、必しも決定的でない。(六) しかし、ケントム語群の一系列を疑なき印歐起源の語たらしめるには、どうしてもサテム語中に對應例が欲しい。まづこゝに Hypothese ad hoc の弱みがある。これを足がかりに論を打ち建てる以上、たとへ相當の確實性を豫期すればこそ立論を敢へてするにはしても、結論の性格として、それが Hypothese über Hypothese たるは、なほ免れがたいところといはざるを得ない。しかも、多かれ少かれ、危惧の念を禁じ得ないにかゝらず、なほ、かくのごとく、不確實な資料に頼らなければならぬといふ事實は、一方、これを量の方からみれば、資料の不足を語るものとなるから、それは、結局において、argumentum ex nihilo より生ずる危険となして擇ぶ所もない。

のみならず、問題の難點は、意味的不一致からも胚胎する。ロシア語 *dozra* は接骨木(?)、ケルト語 *doz* は櫛の類を呼ぶ語であつて、ぶなではない。しかしながら、ギリシヤ語の形についてもこれは言はれるのであつて、*phagos* は櫛の類を指し、やはりぶなではないのである。そこで、まづ、問題をギリシヤ語の場合に限つて考へるならば、こゝにみられる *phagos-fagus* の意味のずれは、ギリシヤ人が半島へ向つて移住してゆくとき、その南下につれてぶな

に接することが次第に乏しくなつていつたので、そのために本来の語義をいつしか忘却して、他の樹名にぶなを指すべき語を轉用してしまつたものと解すればよい。しからば、意味の面に關しては、サテム語の例にも同様の見解を押し擴げて適用して、一般的に誤りといふことはできない。むしろ、事物の名稱が往々にして隣接する小方言間においてさへ、その指す對象に動搖を見る例は、たしかに枚舉に遑がないから、意味上の食ひちがひは、語源的對應が音韻論的に有力であるかぎり、これを否定する根據とはなりがたい。たゞ、事實問題として、クルド及びスラヴの例は、孤立しすぎてゐる感がある。徵證としての年代について、文獻的に溯り得ない點は、少からざる弱みであるといはねばならぬ。

以上から、いかなる解釋が可能となるかといふに、もし、やはりサテム語よりの例を利用し得るものとして進むとするならば、ケントム語の FAGS は、單にケントム語圏内の方言でなく、印歐祖語の統一時代へまで溯り得ることも亦、當然、確實となる。しかし、解釋は、こゝから岐れるのである。北歐說——かりに單純化のために、いはゆる Ostseetheorie (od. Ostseetheese) をかく呼んでおく——をとるホープス及びヒルトは、ぶなの生育地域を以て、たゞちに印歐人の原住地に擬する。もとより、ホープスがぶなの問題を最も重視するとすれば、ヒルトの方は、たとへば、うなぎの分布にもまた相應の重點を置くといふ相違はあつても、所詮、北歐說にとつて、ぶなは、種々の根據を綜合して導き出される歸結の、いはゞ試金石なのである。兩人の主張するところは、イタリック、ゲルマン（及びケルト?）の各語派が共に同一樹木を指すのに比して、他の徵證は意味上の一致を缺くから、ぶなの意が根源的であるといふにある。なるほど、ぶな以外の種々の語義が明かに派生的なものであるならば、それらの轉化を民族の移動

の結果とみるのは、まことに蓋然性に富む解釋である。従つて、逆に、印歐人の故郷は、ぶなの生育地域といふことにもなる。そして、なほ、印歐祖語に溯り得る樹木名が相當に存するのは、印歐人がもと森林地帯の住民であつたためにちがひない。ところが、同一資料から、同時に、否定的見解が成立する。すなはち、シュラーデルやファイストは、FAGUS の語源的對應における意味上の不一致を理由として、原住地推定に對する Fagus の論證力を認めない。しかも、これを以て、單なる水掛論の程度に終らしめず、更に發展せしめ、樹木名に關する印歐語が各語派間において、ぶなに關してのみならず、一般に著しい意味上の不一致を示すのは、印歐人が樹木について即物的知識に乏しかつたせゐであり、従つて彼等は森林地帯の住民ではなかつたとみるべきであるとの解釋をも他の旁證を以て有力に展開し得るのである。

かゝる解釋上の對立を遁れようとするならば、FAGUS を語派的地域的に近接するギリシヤ、イタリック、ゲルマンの三方言にのみ共通の語と一往限つておいて、これらの語派がその分裂以前に使用してゐた共通の方言の流通範圍と、ぶなの生育地域とを一致せしめるに止めておくのが穩當である。^九しかし、これとて、グレコ・イタロ・ゲルマン語とも名付くべき、印歐語から古く分派した方言統一を想定して、初めて成立し得るところである。それはどうでもいゝとしても、これでは、どのみち、印歐人の原住地を推定しようといふ、問題の中心から直接には離れてしまふ。かく見來れば、原住地の問題、自體にういても、甚だ懷疑的にならざるを得ないであらう。たゞ、以上は、原住地の推定資料としては、全く、一例にすぎない。ぶなに基く解釋において否定的見解をとる立場は、材料を他に仰いで立論する。しかし、「ぶなの論 (Buchenerfrage od. Buchenargument)」と銘を打たれて、すでに長い間、有力な學者達

いはゆる「言語學的古生物學」の成立

がこれをめぐる論争に携つてきた以上、やはりこれは原住地推定論の方法に關して、大いに示唆に富む例ではあるといはねばならない。つまり、それは、問題解決の困難そのものに對する象徴的意義を失ふものではない。だから、個別資料に對する批判力を缺き、考證に對する能力を有せぬ異邦の我々にとつても、総合的な立場から問題を眺めるならば、一見してその解決がいかに困難であるかといふ點だけは明かである。而して、少くとも、樹木名に關する限り、他の例についても、その殆どすべてが、ぶなの場合に劣らず、やはり、語形的對應に止り、語派間の意味的一致を缺くといふ事實は、他のもつと難の少い事物についてゞさへ、一般的にみて、意味の再建の困難を思はせる。

かつ、言語的な意味の再建は、それが可能である場合も、當然、極めて概念的な事柄しか教へてくれない。たとへば、印歐人が馬を知つてゐたといふことまでは疑ない。しかし、彼等が、騎馬に長じてゐたか、それとも主として農耕にこれを驅使したか、または食肉或は搾乳が飼育の主目的であつたか、はたまた、果して家畜であつたか、彼等の知つてゐたのは、未だ野生の馬にすぎなかつたのではあるまいかなどは、特殊な條件の存しないかぎり、言語學的歸結の直接に答へ得る問題とならない。而して、印歐人がよく馬をこなし得たかいは、原住地の問題に關係するところ大なのである。(一〇)

かくて、徵證の論證力がいづれも餘り大ではないとすれば、結局、原住地推定論は、暗推を重ねて組み立てられる假構にすぎぬのであらうか。しかしながら、農耕に關する語彙に反映する諸事實、また狩獵や漁撈に關する語彙を通じて推定される諸事實、これらを睨みあはせ、衣食住をめぐる諸々の物質的の生活様式から、進んでは家族制度や種々の精神文化の形態に關する考察にまで互つてその生活環境を限定してゆくとき、少くともある程度の原住地の見當も

つき得る希望は残る。

さて、かゝる難問解決の行論の途上に、ぶなの例が魅力を示したのは、その分布を地圖の上に實際に辿り得たからである。ぶなの分布範圍が限定され、しかも語源的に同一起源に溯る（と認め得る？）語を、サテム語圏内に發見するといふのが、原住地推定に當つて、これを有力な根據とする味噲だつたのである。しかしながら、すでに指摘したごとく、サテム語との語源的脈絡を想定することによつて起る意味の再建の困難といふ障害は、結局、問題の解決を却つて緩和してくれさうにないし、一方、また、たとへ有力な學者達の支持があつても、サテム語の例に宿る弱點は、依然すなほにこれを認めておくべきであらう。

しかし、筆者には何らの下心もあるわけではない。ぶなの問題を進退兩難の窮地へ追ひこんでみて、それで原住地推定論の一般的可能性までもすべて否定してしまはうとは思はない。それには、論點が、あまりに限られた一事例にすぎぬのみならず、ぶなが資料として無力になつたわけでもない。アブラウト (Abraut) の立場から、この語の印歐語起源を確證する方法はこゝには割愛し、別に新しい觀點を求めてみよう。ギリシヤ語派とイタリック語派とは、その親近性の、かつて古く想定せられてゐたよりも、はるかに密接の度合に乏しいことを、比較言語學の立場は明かにした。しかし、それはそれとして、ギリシヤとイタリックにのみ共通な、O語尾の女性名詞の存在は、比較言語學獨自の立場から、兩語派特有の改新と解せられてきたのである。しかしながら、これにはまた、有力な否定的解釋が成立する。かいつまんでいふと、O語尾の女性名詞は、樹木名に多い、而して、印歐祖語の名詞の性別に反映した語義上の一特質として、一般的に、樹木は、その生産力に著目することにより、これを女性として取扱ひ、之に對して、

果實の方はもつばら中性とみなすといふ興味ある現象がみられる。故に、O語尾の女性名詞は、その數において多くないけれども、未だ、名詞の性別原理として、以上のごとき前論理的な思考様式が一般社會に作用してゐた時代において、語義が形態に優越を示したとみれば、その存在こそむしろ當然の事となる。つまり、*lagus* と *phagos* とが、いはゆるO變化の名詞でありながら女性に屬するといふ謎こそ、印歐祖語時代の性別意識によつて解かれるのであつて、古代高地ドイツ語にみる *buoha* のごときは、類推による新たな形成と認められる。従つて、筆者は、*lagus* と *phagos* とに共通する形態論的特質から、その印歐起源を證據だて得ると思ふ。殊に、當該の二語派の親近關係が案外に疎であるとすれば、それだけ、これは一層有力に主張し得る條件下にある。而してまた、O語尾の女性名詞がその範圍ないし數において限られてゐるといふことは、これが、それを淘汰せんとする形態論的類推作用に逆つて殘存したものとすることを語るとすべきであらうから、印歐祖語における名詞の性別の發達が印歐祖語そのもの展開における相對年代からみると、比較の後期に屬するものとすれば、O語尾の名詞に女性を賦與したといふ事實は、*FAGUS* の起源を一層溯らしめるものとみられる。けだし、男・女・中の三性の別は、生類 (*genre animé*) と無生類 (*genre inanimé*) との對立から派生したものであること、確實であり、論者によつては、ヒッタイト語の分派をも三性別の發達以前に擬する。とにかく、性別が、その起源において、形態論的事實に直接の關聯をもたなかつたといふ當然の事實は、ぶなの希拉兩形自體がまた證明する所である。*FAGUS* の形態的な古さは、従つて、少くとも語形としての成立だけは、サテム語圈に語源的對應例を求めることなしにほゞ推論し得るものと信ずる。

かくて、原住地推定論が、ぶなの資料的價值に、いへなく見かぎりをつけてしまへるかどうかも、なほ疑問として

殘る。重要なのは、資料の総合的な解釋であらう。それには、新しい觀點の導入、つまり、根本的には、一層確乎たる批判的方法の樹立が必要であらう。出来るだけの資料は、一往、すでに出揃つてゐる。とにかくも、「言語學的古生物學」的視野の限界に、一つの角度よりの見通しはついた以上、これを越えた新しい視野の展望とその景觀の充實が次には期待される。要するに、原住地推定論につき纏ふ困難は、容易に抜きがたい。しかしながら、また、困難が克服されるべきものであるかぎり、所詮は、やはりまづ、ポジティブな個々の資料の論證的價値を、成心なき態度を以て臨むことによつて、冷靜に評價するのなればならない。ゲルマン語を以てインド・ゲルマンの直系と解し、ドイツを以てインドゲルマン發祥の故地に擬するといふことは、固より、一個の學說として存立し得べきではあるが、かつて、その當時の一部の風潮について、ファイストの摘批した語が今もなほそのまゝに適用し得て、それが國民的虛榮 (die nationale Eitelkeit) に出づるものと評し得るのでなければ、幸せである。筆者は、ぶな(二)を持出しただけで終つてしまつたために、甲論乙駁、紛々として歸する所を知らぬ衆説を一々こゝに拉し來つて吟味を加へるには至らなかつたけれども、原住地論において、じつ所、一時久しく斥けられてゐたかに思はれる北歐説が、近來、また、種々の論據を提げて、捲土重來の勢を呈し來つたといふことは、もはや、ぶなの論とは全く別個の問題として注目すべき、ドイツ學界の動向そのものゝ表徴ではあるまいか。けだし、學問をも國民的感情の支配することまづゝ大なる今日において、歴史研究に浪漫的色彩が再び濃厚となつてきてゐるとすれば、他面、これを斥けようとする意識的な反撥の感情からも、原住地論の隆んになる素地は培はれてゐるといへるであらう。思ひすこしかしれないが、聊か記して以て、一往、拙文を閉ぢる辭に代へる。

いはゆる「言語學的古生物學」の成立

一 橋 論 叢 第十六卷 第一・二號

(第二節・註)

引用書の、著者名のみしか掲げてないものについては、参考書目の方に、書名の詳細があるものと諒知せられたい。

(一) 頬を厭ひ、紙幅の儉約を慮して、個々の對照例の舉示は略す。邦譯名、また大體の目安を示すに止まる (cf. Hirt, Bd. II, S. 622 ff. Feist, S. 191 ff. Schrader-Krahe, S. 33 ff.)

(二) J. Hoops 著條の Reallexikon der germanischen Altertumskunde 第一卷 Buche の項に、その分布圖あり。なほ、Hirt 第二卷末の附圖をも參照。

(三) かぐいふは、ほかならぬ、かのカエサルのカリフ戰記にもある。E. V, 12: Materia cuiusque generis ut in Gallia est praeter fagum abque abietem. — 文勢上 原文に in Britannia の一句は現れないが、前後の脈絡からみれば、當然、it の前でこれを補つてよむべきもの。たゞし、當時すでにブリタニアにぶなの生育してゐたことは、註釋家の均しく指摘するところである。つまり、カエサルの誤記は、それがブリタニアに乏しかつたことを反映する。

(四) Hoops, S. 112 ff. Hirt, Bd. I, S. 189, u. die Ann. dazu (Bd. II, S. 623).

(五) 印歐語は、祖語の時代、すでに、二つの大きな方言に分れてゐたと解せられ、比較言語學の術語では、その一をケントム方言、他をサテム方言と呼ぶ。ギリシヤ、イタリック、ゲルマン、ケルトのほか、トカラとヒッタイトなどが前者に屬し、インド・イラン、バルト・スラヴのほか、アルメニヤ語とアルバニヤ語などが後者に屬する。而して、兩方言の分布關係から、原住地論を取扱ふ方法については、いまは述べぬ。なほ、序ながら、Meillet の Introduction (第八版) 三九七頁に掲げるぶなの語例のうち、bók を v. sl. (古代スラヴ語) と記すは、v. isl. (古代アイスランド語) の誤植。

(六) Hirt も Feist も決して無條件に、この語源的對應を信じてはゐない。結局、多分差支なからうといふ所で、それ／＼自説の材料に採用してゐるのである。

(4) cf. H. Pedersen, *Sprogvidenskaben i det Nittende Aarhundrede* = *Linguistic science in the nineteenth century*, authorized translation by J. Spargo, p. 322 footnote. たゞし、かやうな解釋は、先史時代のギリシヤ人に關する知識を豫め有してゐれば、容易に下し得るところの、最も妥當な解釋であらうから、固よりメーデルセンがその最初の提唱者であるかどうかは知らなう。

(八) Hirt はこれを Schrader を駁する有力な材料と認めて使用した (Bd. I. S. 186)。しかし、これに對しては、さらにマートを駁する根拠より反對がある (cf. Schrader-Krahe, S. 37)。

(九) cf. Pedersen, op. cit. id.

(一〇) 北歐説に對しては、印歐人が *Reitervolk* であつては、都合がわるい。だから、ヒルトは、馬の利用を認めない。これと反對に、馬の原産地を直接原住地論の引合に出すフアイストは、當然、印歐人の馬の利用を大いに認めようとする。双方が互にその證據とする言語學上の事實は、なか／＼に興味が多いけれども、その解決はなほ一長一短たるをまぬかれぬ (cf. Hirt, Bd. I. S. 191, 286, Bd. II. 646. Feist, S. 35, 514 ff. et passim)。

(一一) 參考までに註記しておくが、資料は決して物質的對象物にのみ仰がれるとは限らない。たとへば Johannes Schmidt が數詞に及ぼした古代バビロンの影響を指摘して、印歐人の故郷をバビロンに隣接せる地方に求めんと試みたのは有名である。——しかし、これも、これだけでは、何とでも駁し得る。ヒルトによれば、文化的影響は遠隔の地まで波及し得るから、シエミットの説は、決して説得的なものではないといふ。

(一二) ツルノ語の例 *buz* を報告したトナリニオ Bartholomae およびナルマン語中になと *ablauten* する語を求める Osthoff によつて、これは強く主張されたものごとくである。しかし、アブラウトを認めることと、サテム語の例を認めることとは、これ即ち、結局 *circulus vitiosus* なのではあるまいか。(兩人の説は、それ／＼雑誌 *Indogermanische Forschungen* 及び *Bezenberger Beiträge* に載じたのであるが、筆者は未見)。

こはゆる「言語學的古生物學」の成立

一 橋 論 叢 第十六卷 第一・二號

- (一三) cf. Meillet, Introduction, p. 340.
 (一四) cf. Meillet, Linguistique historique et l. générale, p. 211 ff.
 (一五) J. Lohmann, Genus und Sexus. Studie zum Ursprung der idg. nominalen Genus-Unterscheidung, S. 81.
 (一六) Feist, S. 487.

附。誤解を惧れるがために、重ね々申添へて置くが、原住地論は、ぶなばかりをいぢり廻して、徒に問題の周圍を空轉してゐるものであるかのごとき印象を拙稿が與へるやうであつたら、それは固より、限られた紙幅を十分に活用し得なかつた筆者の責任である。量を顧慮せずにすんだら、少くとも、古くはシュラーデルの南露説、ファイストの中亞説、ならびに、最近、問題を活潑に取扱つたものとしては、ヒルトの記念論文集に現れた諸説、これに對するオーン學派の人達の独自の解釋、或はクラエによるシュラーデル説の全面的な改訂を取上げ得たであらう。しかし、それが許されなかつたにしても、「言語學的・古生物學的」的研究にとつて、印歐人の原住地の推定が desideratum であるといふ點は、本稿を以て示し得たと思ふ。筆者本來の専攻からみれば、足を非専門の領野へ踏み入れたものとの譏も無いではなからうから——たとへ、個人的には相應の根據に基く關心がこゝへ至らしめたとはいへ——いまは、攻學の愉快だけで満足してゐる。まして、本誌が、筆の重い筆者を督勵して、このやうな拙文をものする機會を與へられたことに對する感謝は、紙幅不足の不滿どころではない。そも、私に包懐するところの、原住地論必しも重要ならずとする小見も、幸に筆者自身の關心さへ失せることがなければ、またこれを展示する機會は、いつかあるで

あらう。最後に、数こそは多くないけれども、幸に筆者の一過し得たものうち、最も重要な論著と認むべき数部の書を、参考書目として、次に掲げて置く。淺學の筆者としては甚だ口はばつたくて云ひにくい所であるが、攻究の傳統未だなく、まして一般の關心全く乏しいこの分野に少しでも興味を惹くよすがとならば無駄でないと思ふのである。なほ、洋書入手難の折から、それなくしては本稿を草し得なかつたにちがひないこれら書物の多くを快く貸與せられた辻直四郎先生並びに高津春繁氏の御好誼には心から御禮申上げる。

Hoops, J. Waldbäume u. Kulturpflanzen in germanischen Altertum. Strassburg 1905.

Hirt, H. Die Indogermanen. Ihre Verbreitung, ihre Urheimat u. ihre Kultur. 2 Bände. Strassburg 1905/07.

Schrader, O. Sprachvergleichung und Urgeschichte. Beiträge zur Erforschung des idg. Altertums. 3. Aufl. 2 Teile. Jena 1906 u. '07.

Feist, S. Kultur, Ausbreitung u. Herkunft der Indogermanen. Berlin 1913.

Schrader, O. Die Indogermanen. Neubearbeitet von H. Krahe. Leipzig 1935.

Brandenstein, W. Die erste „indogermanische“ Wanderung. Klotz Bd. 2. Wien 1936 (本書で「はじまりの諸國を説く」)。

Germanen u. Indogermanen. Volkstum, Sprache, Heimat, Kultur. 2 Bände. Festschrift für Herman Hirt.

71 Hirt, von H. Arntz. Heidelberg 1936. (其中「第1冊」 Ergebnisse der Sprachwissenschaft ①中「諸國を

はじめる」諸國を説く中巻】の44頁

的觀點より立論せる諸論考あり、それ〴〵に獨自の解釋を展開してゐて興味深き。

Die Indogermanen-und Germanenfrage. Neue Wege zu ihrer Lösung. Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik. Hrsg. von W. Koppers. (本書の卷頭を飾る A. Nelinng の雄篇は、もはや、*はな*の間題には、何ら觸れる所なく、その原住地論に對する資料的價值についても、一言のもとにこれを斥けてゐる)。

もと、本稿は 昭和十八年の末に脱稿して、本誌に寄せたもの。當時、ファイストの著より引用して記した結びの辭も、すでに、いまとなつては、筆者の意圖した暗示的效力を失つて、色あせたものとなつてしまつたけれども、原形に對する愛着の念からではなく、これも一つの過去の記念にと思つて、舊を存しておく。(昭和二十一年・二月)

本號執筆者紹介

鬼頭仁三郎氏 東京産業大學教授
 山田雄三氏 東京産業大學教授
 龜井孝氏 東京産業大學豫科教授
 山中篤太郎氏 東京産業大學教授